第7回「高校生の神楽甲子園」

第7回「高校生の神楽甲子園」が、7月29日（土）～7月30日（日）の2日間にわたって、神楽門前湯治村で盛大に開催されました。全国各地から約3,800人を超える観衆がつめかけ、北は岩手県から南は宮崎県までの高校生が、神楽の聖地・神楽ドームで全国各地に伝わる伝統芸能を披露しました。

平成23年に始まったこの大会は、今年の参加校も17校に増え年々盛況となっています。この大会は神楽の演技力を競う大会ではなく、時代を担う高校生が各地に伝わる伝統芸能を保存・伝承していく活動であり、また相互に交流する目的で開催しております。参加者全員に「神楽伝承奨励賞」を、安芸高田市長賞として授与していましたが、第4回大会からは、広島県知事賞として授与され、大会の意義が高く評価されています。

神楽の定義は確立されていませんが、私の独自の考えとして、人々が豊作・豊漁・無病息災を「神」に祈願する行為「神事」と定義付けております。全国各地に氏神様が存在し、氏神様を祭る神社があり、地域の人々が独自の方法で地域住民の安全・平和を祈願されていると思います。そのような中、安芸高田市の神楽は、出雲・石見地方の神楽を源流に、伝承の過程で今日の様なテンポの速い、華麗な神楽になってきたと推測しています。今回の大会では、特別出演として、富山県立八尾高等学校の郷土芸能部に「越中八尾おわら」を披露していただきました。この舞は俗に言う「盆踊り」であり、豊作を祈願する富山県八尾地域の伝統行事ですが、広義の意味での神楽（神事）であると私は思っております。

神楽甲子園の運営は、参加高校生による自主運営です。会場の案内・準備・設営・清掃は各校が分担して行い、また、ポスターの図柄・デザインについても高校生が独自で作成しました。昨年は地元の吉田高校、今年は岩手県葛巻高校が立案しました。

また、将来に向かっての神楽の担い手を確保するため、神楽を授業やクラブに取り入れていただけるよう、大学（日本大学・日本体育大学・龍谷大学）との連携を深めています。今年は、日本大学芸術学部の教授がオブザーバーとして参加されています。

第3回大会から出場高校の宿泊は、市内各地の家庭や集会所等で、市民の皆様の協力により対応していただいています。今年は、美土里町北地域（岩手県葛巻高校・15人）、甲田町小原地域（鳥取県日野高校・15人）、高宮町原田地域（静岡県遠江高校・7人）、向原町保垣地域（宮崎県高千穂高校・9人）、吉田町可愛地域（広島県可部高校・15人）、美土里町桑田地域（富山県八尾高校・29人）、高宮町川根地域（岩手県伊保内高校・22人）で宿泊を引き受けていただきました。地域をあげて民泊した高校を応援いただいています。神楽甲子園は、高校生だけでなく、本市と他県地域との連携を深め、地域交流を推進する大きな役割を担うものと考えています。

●題字：安芸高田市長　浜田一義